

学校教員の職務負荷認知がバーンアウト症状に及ぼす影響 その1

-Big Five 性格特性に着目して-

○磯和壮太郎(名古屋芸術大学大学教育学部)

今井田貴裕(人間環境大学心理学部)

キーワード：バーンアウト，職務負荷認知，Big Five，学校教員，調整効果の検討

【目的】

学校教員の多忙感や負担感といった職務負荷認知は、バーンアウト（BurnOut: BO）症状を増悪させる要因である（e.g., 磯和・今井田, 2023）が、職務負荷が過重であると感じていても、BO 症状が増悪しにくい学校教員もいると想定される。しかしながら、職務負荷認知がBO 症状に及ぼす影響における調整要因は未検討である。

個人的要因は、学校教員の BO モデルにおける要因の一つである（落合, 2017; 磯和, 2021）。パーソナリティは主要な個人的要因であり、Big Five（BF）は代表的なパーソナリティのモデルである。学校教員を対象とした海外の研究では、BF のうち神経症傾向はBO 症状を増悪させるのに対し、外向性と勤勉性はBO 症状を抑制する（Kim et. al., 2019）。しかしながら、わが国では教員の BO 症状とBF との関連は管見の限り検討されていない。

そこで本研究では、教員の職務負荷認知とBF がBO 症状に与える影響を検討する。

【方法】

調査対象者 Web 調査サービスに登録し、小・中・高等学校に勤務している管理職ではない教員 340 名のうち、欠損値のなかった286 名を分析対象とした。平均年齢は 46.81 歳（SD = 10.92）であった。

尺度構成 職務負荷認知は学校教員の職務多忙感・負担感尺度（磯和・今井田, 2023）を使用し総得点を得た。BO 症状は伊藤（2000）に倣い久保（1998）の日本版 BO 尺度の「患者」を「児童生徒」に修正して使用し、情緒的消耗感、脱人格化、個人的達成感の低下の各得点を得た。BF は日本語版 Ten Item Personality Inventory（小塩・安部・ピノ, 2012）を使用し、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の各得点を得た。

【倫理的配慮】

本研究は名古屋芸術大学研究倫理審査委員会の承認を得た（名自院学第 246 号）。

【結果】

各BO 症状を従属変数とした階層的重回帰分析をそれぞれ実施した。Step 1 に統制変数として年齢と性別を、Step 2 に独立変数として職務負荷認知と各 BF を、Step 3 にこれらの交互作用項を投入した。モデル比較の結果では、Step 1 から Step 2 においては全てのBO 症状において R^2 が有意に増加した（ $\Delta R^2s = .06 \sim .18, ps < .001$ ）。Step 3 において職務負荷認知と勤勉性との交互作用が一部有意となったが、Step 3 では R^2 の有意な増加が確認されなかった（ $\Delta R^2s = .02, n.s.$ ）。そのため、Step 2 の結果を採用した（ $R^2s = .20 \sim .42, p < .001$ ）。

Step 2 の結果として、職務負荷認知は情緒的消耗感（ $\beta = .50, p < .001$ ）と脱人格化（ $\beta = .35, p < .001$ ）を増悪させたが、個人的達成感の低下には有意な影響がなかった（ $\beta = .08, n.s.$ ）。外向性と協調性は脱人格化（ $\beta = -.14, p < .05, \beta = -.12, p < .05$ ）と個人的達成感の低下（ $\beta = -.19, p < .05, \beta = -.16, p < .05$ ）を有意に抑制した。一方で、神経症傾向は全てのBO 症状（ $\beta s = .17 \sim .22, ps < .05$ ）を、開放性は脱人格化（ $\beta = .13, p < .05$ ）を増悪させた。勤勉性は全BO 症状に有意な影響がなかった。

【考察】

検討課題であったBF の調整効果の一部が有意となったものの、BO 症状への説明力上昇に寄与しなかった。また、海外において勤勉性はBO 症状を抑制する（Kim et. al., 2019）が、本研究ではその結果が得られなかった。一方で、協調性の抑制効果が確認されるなど、海外の研究と異なる点が見られた。これはわが国の教職の特性によるものと考えられた。